城　楽　遺　跡

JOURAKU SITE

埋蔵文化財包蔵地緊急試掘調査報告書

—小黒原住宅団地造成事業—

2002

伊那市教育委員会

伊那市土地開発公社

あ　い　さ　つ

伊那市の西部地区にある小沢は小沢川の谷間に発達した集落のひとつであります。この地区一帯には小沢川の周縁にわたって数多くの原始・古代・中世・近世をはじめとする遺構や遺物が発見されています。

この度、この一角に伊那市土地開発公社による小黒原住宅団地造成事業が導入され、それに先立って城楽遺跡の緊急試掘調査が実施されました。調査結果はこの報告書の通りでありますが、全般的に見て、今回の調査地点一帯が広い範囲を占めている城楽遺跡の西の境界線上であることが判明し、遺跡の規模がはっきりと掌握できました。

本書の刊行によって、伊那西部地区における遺跡の実態を理解して頂ければ幸いです。

最後に、調査関係者、種々ご配慮を賜った地元関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成14年２月28日

長野県伊那市教育委員会

教育長　保　科　恭　治

目　次

あいさつ
目　次
挿図目次
図版目次

第Ⅰ章　城楽遺跡とその環境 …… 3
　第１節　位置と地形 …… 3
　第２節　周辺の遺跡 …… 3
　第３節　遺跡の概要 …… 4

第Ⅱ章　試掘調査の経過 …… 5
　第１節　試掘調査に至るまでの経過 …… 5
　第２節　調査の組織 …… 5
　第３節　試掘調査日誌 …… 6

第Ⅲ章　試掘調査 …… 8
　第１節　調査の概要 …… 8
　第２節　遺　　物 …… 8
　　(1)　土器 …… 8
　　(2)　石器 …… 9

第Ⅳ章　所　　見 …… 10

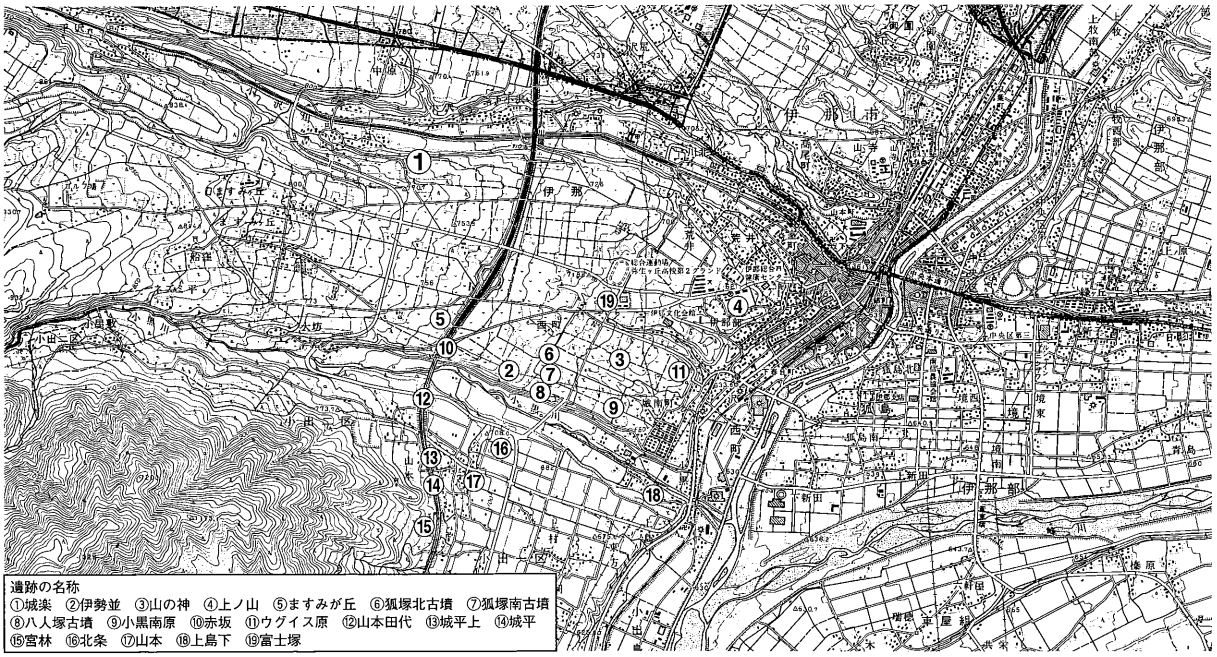
挿　図　目　次

第１図　遺跡分布図（城楽遺跡付近の主要な遺跡）… 3
第２図　地形及びトレンチ配置図 …… 8
第３図　出土土器拓影 …… 9
第４図　出土石器実測図 …… 10

図　版　目　次

図版１　遺跡遠景
図版２　発掘調査状況
図版３　発掘調査状況
図版４　発掘調査状況
図版５　発掘調査状況及び遺物出土状況

第Ⅰ章　城楽遺跡とその環境



第１図　遺跡分布図（城楽遺跡付近の主要な遺跡）（1：50,000）

第１節　位置と地形

今回、試掘調査を実施した地域は城楽遺跡の最西端に位置しており、行政上、長野県伊那市小沢地籍の最南端に所在している。南側は小黒川左岸河岸段丘、北側は小沢川右岸河岸段丘に挟在された通称小黒原山麓扇状地北側の扇側部分に該当し、いわば小沢川右岸河岸段丘の突端部に位置している状況下である。この一帯を形成している基盤は天竜川の支流である小沢川礫層が主流で、なかに三峰川礫層が混在している。この現象は河川の氾濫時に三峰川が西側に押し込んだ確たる証拠となっている。これらの礫層の上には何層にもわたって厚くテフラ層が覆い伏さっている。城楽遺跡の東端部付近にはテフラ層の一部分に深い亀裂が混入し、これらは南北に長く走る活断層の痕跡であり、学名は「小黒川活断層」と命名され、日本地質学会で一大センセーションを巻き起こしている。遺跡地の面より若干下った北側は小規模の水田地帯が展開しており、古い時期の土地改良のため、区画は整然としていない。

第２節　周辺の遺跡

今回、試掘調査を実施した地点は遺跡の存在性が極めて希薄と判断して調査に取りかかった。試掘調査を実施してみると、遺構の検出は全く無く、遺物の出土は後述のようであった。このことは、城楽遺跡のうちで、いわば遺物散布地帯に該当するのであろう。近くに、江戸時代前期に開削された「旧原田井筋」の取入口が設置されており、いわば水便の最悪地となっている状況下であり、したがって集落址の存在が皆無であっても当然である。この状況は明らかに遺跡の存在は水との関連性を見事に実証してくれた生きた証拠と成り得るのであろう。

これらの関連性は先史地理学あるいは集落地理学の一部分であり、今後の研究成果が期待されるところである。いわば、考古学と地理学との一体的な研究が必要不可欠である。

調査結果については後述する。その他、周辺の主要な遺跡の内訳については今までに刊行された数多くの『遺跡発掘調査報告書』に掲載されているので、それらを参考にして頂き、今回は割愛するので、ご承知願いたい。

第３節　遺跡の概要

城楽遺跡は過去、二回にわたって緊急発掘調査を実施した。第１回目は中央自動車道開鑿時によるもので、これに関しての調査報告書が昭和48年度に長野県教育委員会より刊行された。これによれば検出された遺構は縄文前期後半の土坑１基、縄文後期前半の土坑１基、時期不詳の土坑２基、時期不詳のマウンド１基、近世の井筋１基、時期不詳の溝状遺構３基、太平洋戦争時の竪穴３基であった。加えて、この調査で出土した土器類は縄文後期前半の堀の内式、縄文前期末葉の下島式、縄文早期中葉の楕円押形文等々であった。

第２回目は市道原田井１号線拡幅工事事業によるもので、これに関しての調査報告書が平成13年に刊行された。これによれば、「検出された遺構は縄文前期後半の竪穴住居址１軒、江戸時代の井筋１基であった。円形状の竪穴住居址で、その規模は南北2m80cm程度、東西3m20cm程度の数値を数える。壁面は20～30cm内外を測り、外傾気味で、軟弱を呈していた。床面は軟弱気味で、ブロック的な凹凸は認められたが、大般、平坦であった。10本の柱穴が検出され、配置状態からみて円錘形状の屋根棟を成していたのであろう。」

発掘調査によって分かった井筋（高遠藩鳥居公時代に開鑿されたことがわかる古文書類が発見され、これらは多く文献に紹介され、地元では「旧原田井筋」と親しみを持って呼んでいる）について概略を述べてみる。表土面より50cm位下ったソフトテフラ層面を掘り込んで構築してある。井筋の上面幅は約６ｍ、底面幅は３ｍ位を、深さは最深部で２ｍ程度をそれぞれ測る。南側の壁面はところどころで若干の凹凸が認められたが、全般的に急傾斜を成し、一見するに井筋と判断できた。壁面の上部はソフトテフラ層、中・下部はハードテフラ層によって組成土は成り立っていた。北側の壁面は撹乱が顕著で、その実態は把握が不可能であった。

底面は南側と、北側に二つの凹みが見られ、上部から中部にかけては本流が西から、東へ走り、底面に至っては小さな流れが二本存在していたことが分かる。底面を組成しているテフラ層は流速が激しかったとみえて、ところどころに凹みを造り出し、その中に多量の砂が堆積していた。

住居址から関西系の北白川下層Ⅲ式土器が出土。これらの土器に混じって関東系の諸磯ｂ式土器が出土しており両地方の文化的接点が分かる。　（飯塚政美）

第Ⅱ章　試掘調査の経過

第１節　試掘調査に至るまでの経過

今回、試掘調査の該当地となった城楽遺跡は小黒原住宅団地造成事業に伴う緊急試掘調査であり、調査が実施されるまでには各種の保護協議、事務上の手続きが実施され、それらの動きを年月日の順に従って記しておくことにする。

平成12年11月14日、長野県教育委員会文化財・生涯学習課職員、伊那市教育委員会社会教育課職員、伊那市土地開発公社職員の三者で綿密な保護協議を実施、支障のないように努めた。

平成13年７月９日付けで、城楽遺跡試掘調査終了報告書を長野県教育委員会教育長宛に提出。

平成13年７月９日付けで、城楽遺跡埋蔵物発見届の拾得についてを伊那警察署長宛に提出。

平成13年７月９日付けで、城楽遺跡埋蔵文化財保管証を伊那警察署長を経由して長野県教育委員会へ提出。

平成13年12月20日付けで、友野良一前発掘調査団長の死亡にともない発掘調査団長を御子柴泰正に変更する。

第２節　調査の組織

緊急試掘調査に着手する前に次のような組織編成を行い、万全を期した。

伊那市教育委員会

委員長	登内　孝	
委員長代理	小坂栄一	（平成13年12月21日まで）
〃	上島武留	（平成13年12月22日から）
委員	伊藤晴夫	
〃	田畑幸男	（平成13年12月22日から）
教育長	保科恭治	
教育次長	伊藤　隆	
事務局	塚本哲朗	（社会教育課長）
〃	伊藤初美	（副参事・社会教育課長補佐・女性室長・青少年係長）
〃	白鳥今朝昭	（社会教育課長補佐・社会教育係長）
〃	田原節子	（社会教育青少年係）
〃	飯塚政美	（社会教育係）
〃	牧田としみ	（社会教育係）
〃	高松慎一	（社会教育係）

試掘調査団

団　　長	友　野　良　一（日本考古学協会会員）（平成13年12月19日まで）
〃	御子柴　泰　正（長野県考古学会会員）（平成13年12月20日から）
調　査　員	飯　塚　政　美（日本考古学協会会員）
〃	本　田　秀　明（長野県考古学会会員）
〃	高　松　慎　一（上伊那郷土研究会会員）
作　業　員	城倉三成　織井和美　酒井公士郎　有賀秀子　小田切守正（敬称略順不同）

第３節　試掘調査日誌

平成13年５月25日㈮　伊那市考古資料館にて発掘機材、測量機材の点検、整備を実施する。

平成13年５月28日㈪　発掘現場へ発掘機材一式を運搬する。スペースハウスを建てる場所を選定し、その場所をバックフォーにて整地を行う。住宅団地予定地の全面を被っている薮切りを開始する。

平成13年５月29日㈫　引き続き、薮開きを進める。

平成13年６月１日㈮　薮切りを実施する。

平成13年６月４日㈪　道路を隔てた北側に東から西へ向かって第１号トレンチから第10号トレンチを設定して南側から北側へ向かって掘り進める。第１号トレンチから第３号トレンチまで、掘り下げを完了するが、遺構・遺物の検出は何もなかった。

平成13年６月５日㈫　第４号トレンチ、第５号トレンチを掘り進めると、後者のトレンチより縄文中期土器が１片出土した。

平成13年６月７日㈭　第６号トレンチから第10号トレンチまで掘り進めると、第６号トレンチより硬砂岩製の石錘出土。午前中一杯かかって４本のトレンチをほぼ掘り上げる。道を隔てた南側を東側より掘り進めると、東西に長楕円形状の黒い落ち込みを発見する。南北にベルト

試掘風景

試掘風景

を残して、掘り進めると、なかから多量の木炭片が出土したが本日の段階では何を意味しているかは不明であった。

平成13年６月８日㈮　昨日、検出されたのは炭焼場と判明し、ベルトを残してほぼ完掘する。西側のトレンチを掘り進めていくと同様な形態での炭焼場が検出され、ベルトを残してほぼ完掘し終える。完形に近い美事な打製石斧が出土した。

平成13年６月11日㈪　トレンチ掘りを西側へ進める。遺構・遺物の検出は全く無かった。薮切りを実施する。

平成13年６月18日㈪　トレンチ掘りを西側へ進めるが、遺構・遺物の検出は全く無かった。

平成13年６月25日㈪　トレンチ掘りを西へ西へと進める。打製石斧が１点出土した。

平成13年６月26日㈫　トレンチ掘りを西へ次々と続行していくが、遺構・遺物はなにも検出されなかった。

平成13年６月27日㈬　トレンチを西側へ掘り進めていくと土師器片が出土し、付近一帯を拡張して掘り進めていく。

平成13年６月28日㈭　東西に走る道を隔てて北側の第１号トレンチ～第10号トレンチ、南側の第11号トレンチ～第15号トレンチの写真撮影終了。西側へ掘り進めると、溝が東西に走る。何の遺構かは不明であった。ところが遺跡発掘を見学に来た付近の住民は昭和30年代までこの一帯で放牧していた事実を語ってくれた。このことを踏まえてみると放牧馬の柵跡と考えられるのではないか。

平成13年６月29日㈮　第１号トレンチ～第23号トレンチまでの全測図作成。第16号トレンチ～第23号トレンチの写真撮影終了

平成13年７月２日㈪　第１号トレンチ～第10号トレンチまでの埋め戻しを完了する。

平成13年７月３日㈫　第11号トレンチ～第15号トレンチまでの埋め戻しを完了する。放牧馬と思われる柵跡の精査を実施する。

平成13年７月４日㈬　埋め戻しを進める。本日にて道具の後片付けを終了する。

平成13年７月５日㈭　重機にて埋め戻しを実施する。

平成13年７月６日㈮　埋め戻しを完了し、本日にて全作業を終了する。

平成13年11月～平成14年２月　遺物の整理、遺物の実測、図版の作製、写真撮影、報告書を印刷所へ送る。３月の報告書刊行に努力を払った。

平成14年２月　報告書の校正。

平成14年３月　報告書を刊行し、本事業の完了をみた。　（飯塚政美）

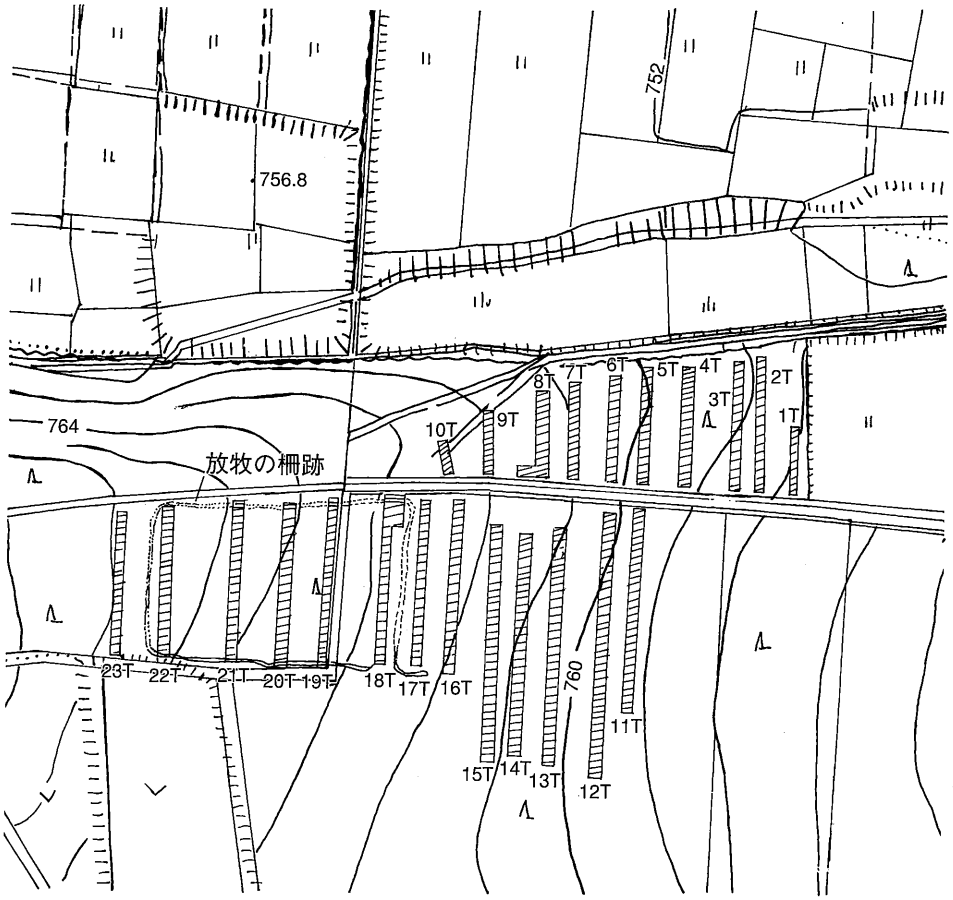
第Ⅲ章　試掘調査

第１節　調査の概要

城楽遺跡周辺の土地利用は平地林一帯を除いてほぼ全域にわたって農振農用地域内に指定されており、現況は水田、畑に有効利用されている。春先は若菜の息吹きが感受でき、夏ともなれば、農作物が青々と繁茂し、秋ともなれば稲穂の波がゆれ動き、四季の折り成す様は、まさに自然景観がよく残存している状況下である。

遺跡地の試掘調査地点は樹齢50年程度の唐松が林立していた。試掘調査を実施する時点では、これらをきれいに伐採してはあったが、小灌木があたり一面に覆い茂っており、試掘調査作業は抜根に難渋すると最初から覚悟を決めていた。

試掘調査結果は『試掘調査報告書』の通りである。遺構の検出は何もなく、遺物については第２節で述べてある。



第２図　地形及びトレンチ配置図（１：2,000）

第２節　遺　　物

(1) 土　器（第３図）

この図に掲載した土器片は全てグリット内より出土したものであり、時期的に大別すると、

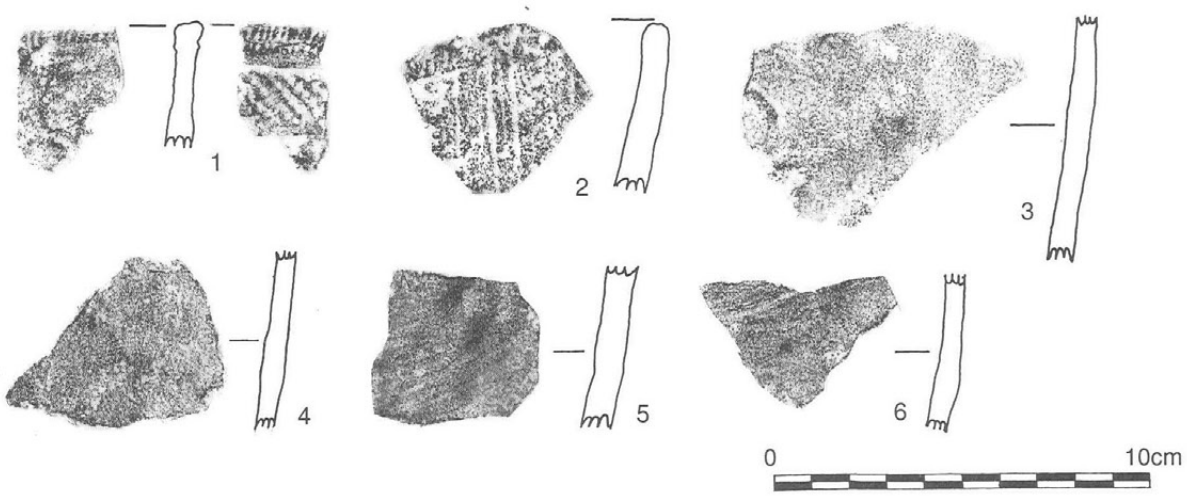
縄文前期後葉、縄文中期前葉、平安時代中期頃である。

（1）は器厚が5mm程度と薄手に属し、やや外反気味を呈する口縁部破片である。外面の現況は剥落してしまってよく分からないが、おそらく、内面に施されているような斜縄文が全面にわたって施されていたと、加えて口縁直下に低い隆帯が横位状に貼り付けられていたと考えられる。

口唇部の内面には点列状に横位の刻目文が明瞭に見られ、その直下に接して低い隆帯が横走しながら、その下に斜縄文があり、下端部は無文帯が展開している。茶褐色を呈し、焼成は良好で、多量の雲母を含む。縄文前期後葉に関西地方で隆盛し、広範囲に波及した北白川下層Ⅲ式の一派かと思われる。

（2）は器厚が7mm程度と中厚手に含まれ、やや内反する口縁部破片で、口唇部は丸味状を呈し、無文地にヘラ先による深い沈線を間バラに斜走させ、変化を持たせている。黄褐色を呈し、多量の長石を含み、焼成は中位であり、縄文中期前葉頃の所産であろう。

（3～6）は同一個体で、平安時代中期頃の土師器である。赤茶褐色を呈し、焼成は良好で、少量の長石粒を含む。



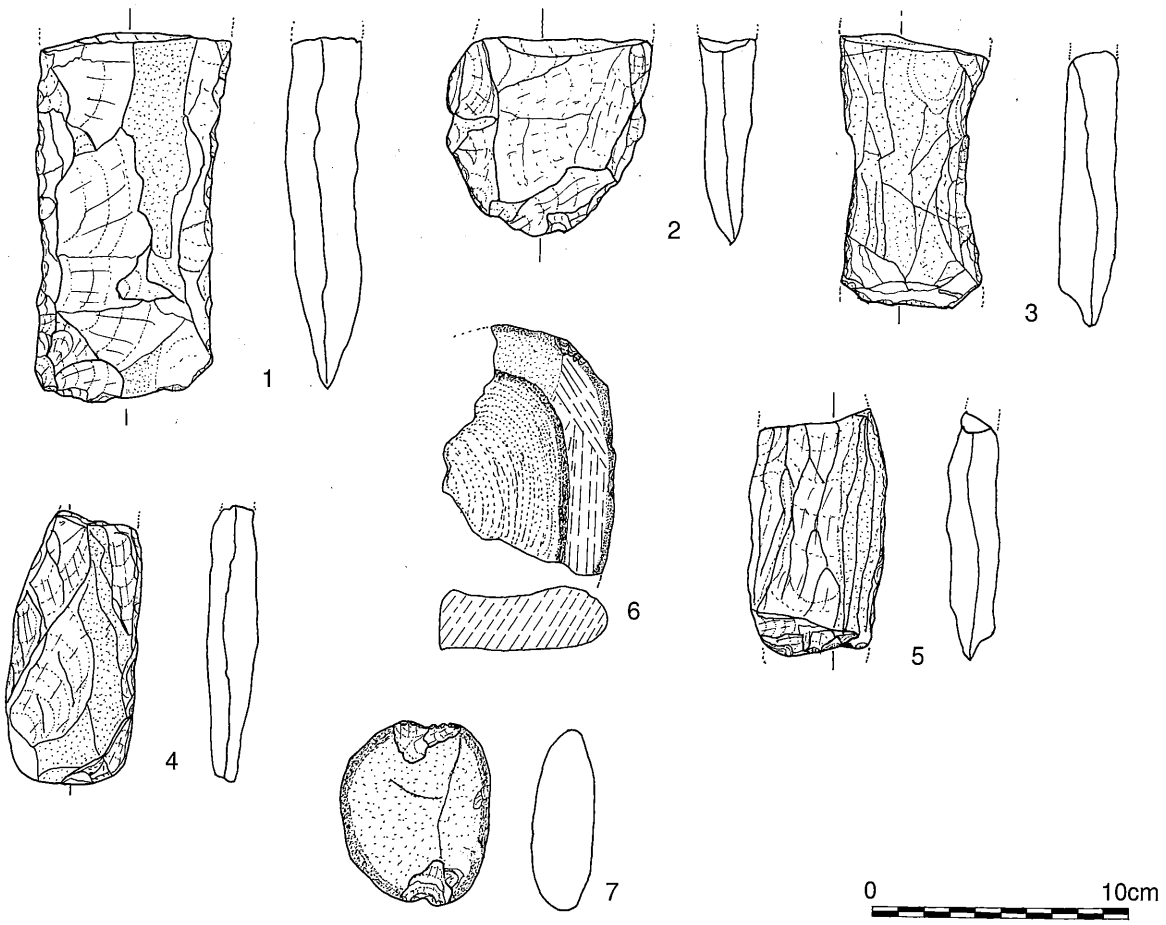
第３図　出土土器拓影

(2) 石　器（第４図）

打製石斧　この部類に含まれるのは第４図（１～５）であり、これらを形態的に分類すると短冊形（１、５）、撥形（２、４）、分銅形（３）である。石質は緑色岩（１～２、４～５）、硬砂岩（３）である。なかでも（１）は大形で、「縄文中期農耕起源論」を展開するのに、しばしば用いられる石鍬に酷似している。

石　皿　この部類に含まれるのは（６）であり、大部分は欠損してしまって、ほんのわずか残っているにすぎない。凹みは比較的に浅く、材質は緑色岩である。

石　錘　（７）が該当し、砂岩の両端を打ち欠いて製作してあり、その凹みは大である。



第４図　出土石器実測図

第Ⅳ章　所　　見

城楽遺跡は今回の調査を含めて三回にわたって何らかの形で調査が実施されたことになる。第一回目、第二回目の調査結果については『本報告書』の第Ⅰ章　城楽遺跡とその環境　第３節　遺跡の概要で述べており、ここでは省略する。

今回の試掘調査は17,000m²に及ぶ広範囲で実施された。この調査面積の中に、南北に長く、23本のトレンチを入れたが、ほんのわずかな遺物出土が見られただけで、遺構の検出は全く無い。このことより、単なる遺物散布地と確証できる。出土した石器の組成より集落址を外縁的に取り巻いている、いわば当時の人々の生活行動範囲が把握できる。狩猟用的なものより、材木の伐採が主流となっていた。

一方、土器片の割れ口が顕著に摩耗しており、上流からの流失が濃厚と思われる。現在、遺跡の把え方からして、その場所で出土した遺物は、その遺跡から出土したものと決めつけているが遺物の製作年代から見て、はたして、その遺跡に密接しているかは、今回の場合のような時は疑問視される面が多い。つまり、周辺の遺跡とからめて広範囲の生活復元が可能となってくるのである。

（飯塚政美）

図版1　遺跡遠景

遺跡地を南側より眺む

遺跡地を西側より眺む

図版2　発掘調査状況

第1号トレンチ

第2号トレンチ

第3号トレンチ

第4号トレンチ

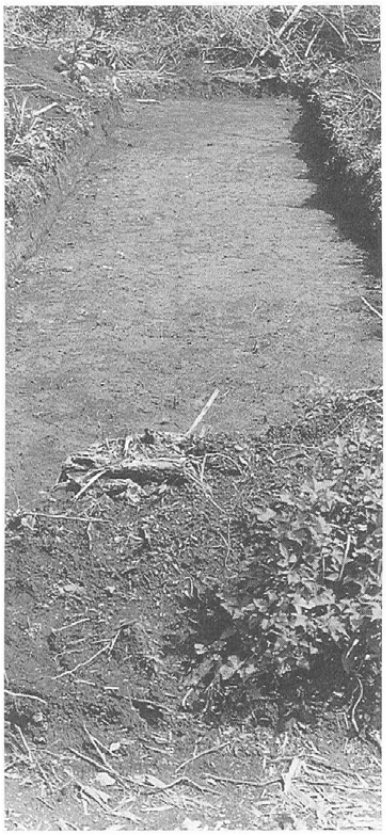
第5号トレンチ

第6号トレンチ

図版3　発掘調査状況

第７号トレンチ

第８号トレンチ



第９号トレンチ

第11号トレンチ

第12号トレンチ

第13号トレンチ

図版4　発掘調査状況

第14号トレンチ

第15号トレンチ

第16号トレンチ

第17号トレンチ

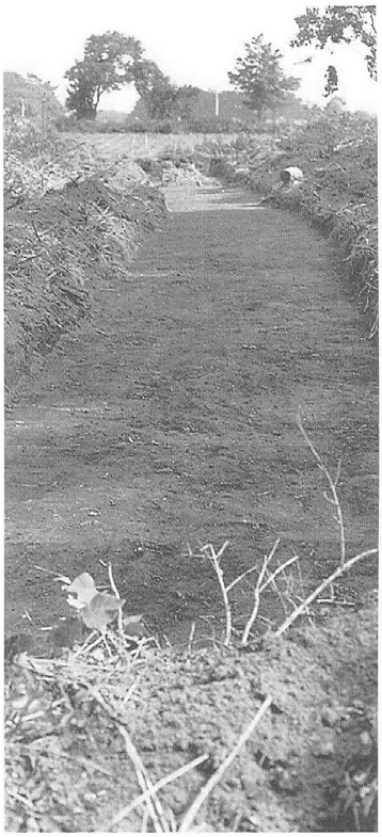
第18号トレンチ

第19号トレンチ

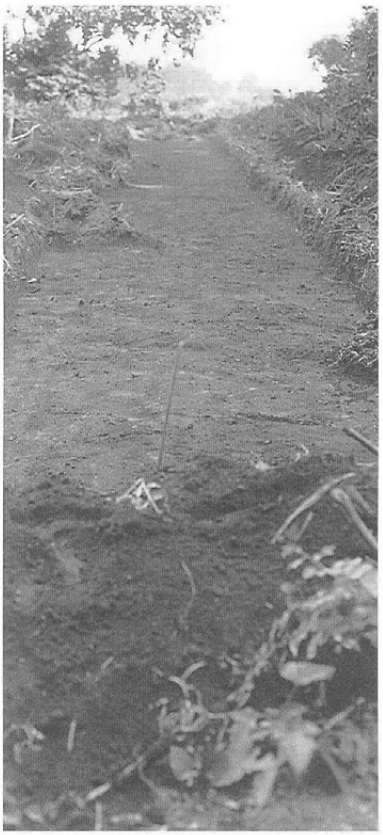
図版5　発掘調査状況及び遺物出土状況

第20号トレンチ

第21号トレンチ



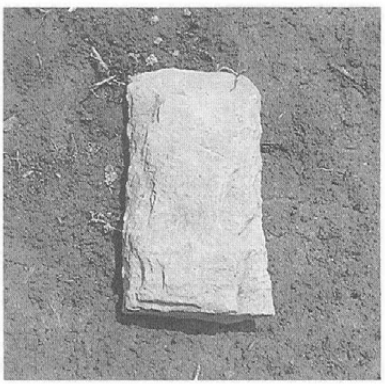
第22号トレンチ



第23号トレンチ

土器出土状況

石器出土状況



石器出土状況

石器出土状況

報告書抄録

ふりがな	じょうらくいせき
書名	城楽遺跡
副書名	小黒原住宅団地造成事業
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	埋蔵文化財包蔵地緊急試掘調査報告書
編著者名	友野良一　御子柴泰正　飯塚政美
編集機関	伊那市教育委員会
所在地	〒396-8617 長野県伊那市大字伊那部3050番地　TEL0265－78－4111
発行年月日	西暦2002年3月8日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
じょうらく 城楽	ながのけん いなし 長野県 伊那市 おざわ 小沢	伊那市	64			平成13年 5月25日 ～ 平成13年 7月6日	17,000	小黒原住宅団地造成事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城楽	散布地	縄文時代 平安時代	なし	縄文時代前期土器 縄文時代中期土器 縄文時代中期石器 平安時代土師器	17,000㎡に及ぶ広範囲の試掘調査であったにもかかわらず、ほんのわずかな遺物出土が見られただけであった。遺構の検出は全く無く、単なる遺物散布地と確証できた。石器の出土より当時の人々の生活行動範囲が把握できる。 一方、土器片の割れ口が顕著に摩耗しており、上からの流れの可能性が濃厚と思われる。

城 楽 遺 跡

埋蔵文化財包蔵地緊急試掘調査報告書

—小黒原住宅団地造成事業—

平成14年3月6日　印　刷

平成14年3月8日　発　行

発行所　伊那市教育委員会
　　伊那市土地開発公社

印刷所　伊那市　㈱小松総合印刷